

鳴

——ひそひそ聞える。なんだか聞える。

太宰治

青空文庫

鷗かもめというの、あいつは、唾おしの鳥なんだってね、と言うと、たいていの人は、おや、そ
 うですか、そうかも知れませぬね、と平気で首肯するので、かえってこつちが狼狽ろうばいして、
 いやまあ、なんだか、そんな気がするじゃないか、と自身の出鱈目でたらめを白状しなければなら
 なくなる。唾は、悲しいものである。私は、ときどき自身に、唾の鷗を感じることがある。
 いいとしをして、それでも淋さびしさに、昼ごろ、ふらと外へ出て、さて何のあても無し、
 路みちの石塊を一つ蹴つてころころ転がし、また歩いて行って、そいつをそつと蹴つてころこ
 ろ転がし、ふと気がつくと、二、三丁ひとつの石塊を蹴つては追つて、追いついては、ま
 た蹴つて転がし、両手を帯のあいだにはさんで、白痴の如く歩いているのだ。私は、やは
 り病人なのであろうか。私は、間違つているのであろうか。私は、小説というものを、思
 いちがいしているのかも知れない。よいしよ、と小さい声で言ってみて、路のまんなかの
 水たまりを飛び越す。水たまりには秋の青空が写つて、白い雲がゆるやかに流れている。
 水たまり、きれいだなあと思う。ほつと重荷がおりて笑いたくなり、この小さい水たまり
 の在るうちは、私の芸術も拠よりどころが在る。この水たまりを忘れずに置こう。

私は醜態の男である。なんの指針をも持つていない様子である。私は波の動くがままに、

右にゆらり左にゆらり無力に漂う、あの、「群集」の中の一人に過ぎないのではなからうか。そうして私はいま、なんだか、おそろしい速度の列車に乗せられているようだ。この列車は、どこに行くのか、私は知らない。まだ、教えられていないのだ。汽車は走る。轟ごう々うごうの音をたてて走る。イマハ山中ヤマナカ、イマハ浜ハマ、イマハ鉄橋、ワタルゾト思ウ間モナクトンネルノ、闇ヲトオツテ広野ハラ、どんどん過ぎて、ああ、過ぎて行く。私は呆然ぼうぜんと窓外の飛んで飛び去る風景を迎送している。指で窓ガラスに、人の横顔を落書して、やがて拭き消す。日が暮れて、車室の暗い豆電燈が、ぼつと灯ともる。私は配給のまずしい弁当をひらいて、ぼそぼそたべる。佃煮つくだにわびしく、それでも一粒もあますところ無くたべて、九銭のバットを吸う。夜がふけて、寝なければならぬ。私は、寝る。枕の下に、すさまじい車輪疾駆しつくの叫喚きようかん。けれども、私は眠らなければならぬ。眼をつぶる。イマハ山中、イマハ浜、——童女があわれな声で、それを歌っているのが、車輪の怒号の奥底から聞えて来るのである。

祖国を愛する情熱、それを持っていない人があるうか。けれども、私には言えないのだ。それを、大きい声で、おくめんも無く語るといふ業わざが、できぬのだ。出征の兵隊さんを、人ごみの陰から、こっそり覗のぞいて、ただ、めそめそ泣いていたこともある。私は丙種へいしゆで

ある。劣等の体格を持って生れた。鉄棒にぶらさがっても、そのまま、ただぶらんとさがっているだけで、なんの曲芸も動作もできない。ラジオ体操さえ、私には満足にできないのである。劣等なのは、体格だけでは無い。精神が薄弱である。だめなのである。私には、人を指導する力が無い。誰にも負けぬくらいに祖国を、こっそり愛しているらしいのだが、私には何も言えない。なんだか、のどまで出かかっている、ほんとうの愛の宣言が私にも在るような気がするのであるが、言えない。知っていながら、言わないのではない。のどまで出かかっているような気がするのだが、なんとしても出て来ない。それはほんとうにいい言葉のような気もするのであるが、そうして私も今その言葉を、はつきり掴つかみたいのであるが、あせると尚なおさら、その言葉が、するりするりと逃げ廻る。私は赤面して、無能者の如く、ぼんやり立ったままである。一片の愛国の詩も書けぬ。なんにも書けぬ。ある日、思いを込めて吐いた言葉は、なんたるぶざま、「死のう！ バンザイ。」ただ死んでみせるより他に、忠誠の方法を知らぬ私は、やはり田舎いなかくさい馬鹿である。

私は、矮わいしょう小無力の市民である。まずしい慰問袋を作り、妻にそれを持たせて郵便局に行かせる。戦線から、ていねいな受取通知が来る。私はそれを読み、顔から火の発する思いである。恥ずかしさ。文字のとおり「恐縮」である。私には、何もできぬのだ。私

には、何一つ毅然たる言葉が無いのだ。祖国愛の、おくめんも無き宣言が、なぜだか、私には、できぬのだ。こつそり戦線の友人たちに、卑屈な手紙を書いているだけなのである。

（私は、いま何もかも正直に言ってしまうおうと思っている。）私の慰問の手紙は、実に、下手くそなのである。嘘ばかり書いている。自分ながら呆れるほど、齒の浮くような、いやらしいお世辞なども書くのである。どうしてだろう。なぜ私は、こんなに、戦線の人に對して卑屈になるのだろうか。私だって、いのちをこめて、いい芸術を残そうと努めている筈では無かったか。そのたつた一つの、ささやかな誇りをさえ、私は捨てようとしている。戦線からも、小説の原稿が送られて来る。雑誌社へ紹介せよ、というのである。その原稿は、洋箋に、米つぶくらいの小さい字で、くしゃくしゃに書かれて在るもので、ずいぶん長いものもあれば、洋箋二枚くらいの短篇もある。私は、それを真剣に読む。よくないのである。その紙に書かれてある戦地風景は、私が陋屋の机に頬杖ついて空想する風景を一步も出ていない。新しい感動の発見が、その原稿の、どこにも無い。「感激を覚えた。」とは、書いてあるが、その感激は、ありきたりの悪い文学に教えこまれ、こんなところで、こんな工合に感激すれば、いかにも小説らしくなる、「まとまる」と、いい加減に心得て、浅薄に感激している性質のものばかりなのである。私は、兵隊さんの泥と汗と血

の労苦を、ただ思うだけでも、肉体的に充分にそれを感じ取できるし、こちらが、何も、ものが言えなくなるほど崇敬している。崇敬という言葉さえ、しらじらしいのである。言えなくなるのだ。何も、言葉が無くなるのだ。私は、ただしゃがんで指でもって砂の上に文字を書いては消し、書いては消し、しているばかりなのだ。何も言えない。何も書けない。けれども、芸術に於いては、ちがうのだ。齒が、ぼろぼろに欠け、背中は曲り、ぜんそくに苦しみながらも、小暗い露路で、一生懸命ヴァイオリンを奏している、かを見るかげもない老爺ろうやの辻音楽師つじを、諸君は、笑うことができるであろうか。私は、自身を、それに近いと思っている。社会的には、もう最初から私は敗残しているのである。けれども、芸術。それを言うのも亦また、実に、てれくさくて、かなわぬのだが、私は痴こけの一念で、そいつを究明しようと思う。男子一生の業として、足りる、と私は思っている。辻音楽師には、辻音楽師の王国が在るのだ。私は、兵隊さんの書いたいくつかの小説を読んで、いけないと思つた。その原稿に対しての、私の期待が大きすぎるのかも知れないが、私は戦線に、私たち丙種のものには、それこそ逆立ちさかだしたつて思いつかない全然新しい感動と思案が在るのではないかと思つているのだ。茫洋ぼうようとした大きなもの。神を眼のまえに見るほどの永遠の戦慄せんりつと感動。私は、それを知らせてもらいたいのだ。大げさな身振りでなくともよ

い。身振りは、小さいほどよい。花一輪に託して、自己のいつわらぬ感激と祈りとを述べ
るがよい。きつと在るのだ。全然新しいものが、そこに在るのだ。私は、誇りを以て言う
が、それは、私の芸術家としての小さな勘かんでもって、わかっているのだ。でも、私には、
それを具体的には言えない。私は、戦線を知らないのだから。自己の経験もせぬ生活感情
を、あてずっぽうで、まことしやかに書くほど、それほど私は不遜ふそんな人間ではない。いや、
いや、才能が無いのかも知れぬ。自身、手さぐって得たところのものでなければ、絶対に
書けない。確信の在る小さい世界だけを、私は踏み固めて行くより仕方がない。私は、自
身の「ぶん」を知っている。戦線のこと、戦線の人に全部を依頼するより他は無いのだ。
私は、兵隊さんの小説を読む。くやしいことには、よくないのだ。ご自分の見たところ
の物を語らず、ご自分の曾かつて読んだ悪文学から教えられた言葉でもって、戦争を物語つ
ている。戦争を知らぬ人が戦争を語り、そうしてそれが内地でばかな喝かつさい采を受けている
ので、戦争を、ちゃんと知っている兵隊さんたちまで、そのスタイルの模倣まぼをしている。
戦争を知らぬ人は、戦争を書くな。要らないおせっかいは、やめろ。かえって邪魔になる
だけではないのか。私は兵隊さんの小説を読んで、内地の「戦争を望遠鏡で見ただけで戦
争を書いている人たち」に、がまんならぬ憎悪を感じた。君たちの、いい気な文学が、無む

垢な兵隊さんたちの、「ものを見る眼」を破壊させた。これは、内地の文学者たちだけに言える言葉であつて、戦地の兵隊さんには、何も言えない。くたくたに疲れて、小閑を得たとき、蠟燭ろうそくの灯の下で懸命に書いたのだろう。それを思えば、芸術がどうのこうのと自分の美学を展開するどころでは無い。原稿に添えて在るお手紙には、明日知れぬのちゆえ、どうか、よろしくたのみます、と書いているのだ。私は、その小説を、失礼だが、

(私には、その資格がないのだが)少し細工する。そうして妻に言いつけて、そのくしゃくしゃの洋箋の文字を、四百字詰の原稿用紙に書き写させる。三十何枚、というのが、一ばん長かつた。私は、それを、ほうぼうの職業雑誌に、たのむのである。「割に素直に書かれて在ると思いますから、いい作品だと思いますから、どうかよろしくお願いいたします。私みたいな、不徳の者が、兵隊さんの原稿を持ち込みするということに、唐突の思いをなされるかも知れませんが、けれども人間の真情はまた、おのずから別のもので、私だつて、」と書きかけて、つい、つまずいてしまうのだ。何が「私だつて」だ。嘘も、いい加減にしろ。おまえは、いま、人間の屑くず、ということになつているのだぞ。知らないのか。私は、それを知っている。いやになるほど、知らされている。それだからこそ、つい、つまずいてしまうのだ。私は、五年まえに、半狂乱の一期間を持ったことがある。病気が

なおつて病院を出たら、私は焼野原にひとりぽつんと立っていた。何も無いのだ。文字どおり着のみ着のままである。在るものは、不義理な借財だけである。かみなりに家を焼かれて瓜の花。そんな古人の句の酸鼻が、胸に焦げつくほどわかるのだ。私は、人間の資格をさえ、剥奪されていたのである。

私は、いま、事実を誇張して書いてはいけない。充分に気をつけて書いているのであるから、読者も私を信用していいと思う。れいのひとりよがりの誇張法か、と鼻であしらわれるのが、何より、いやだ。当時、私は、人から全然、相手にされなかつた。何を言つても、人は、へんな眼つきをして、私の顔をそつと盗み見て、そうして相手にしないのだ。私についての様々の伝説が、ポンチ画が、さかしげな軽侮の笑いを以て、それからそれと語り継がれていたようであるが、私は当時は何も知らず、ただ、街頭をうろろしていた。一年、二年経つうちに、愚鈍の私にも、少しずつ事の真相が、わかつて来た。人の噂に依れば、私は完全に狂人だったのである。しかも、生れたときからの狂人だったのである。それを知つて、私は爾来、唾になつた。人と逢いたくなくなつた。何も言いたくなくなつた。何を人から言われても、外面ただ、にこにこ笑っていることにしたのである。

私は、やさしくなつてしまつた。

あれから、もう五年経った。そうして今でもなお私は、半きちがいと思われているようだ。私の名前と、そうしてその名前からまる伝説だけを聞き、私といちども逢ったことの無い人が、何かの会で、私の顔を、気味わるそうに、また不思議なものを見るような、なんとも言えない失敬な視線で、ちらちら観察しているのを、私はちゃんと知っている。私がかわや厠に立つと、すぐその背後で、「なんだ、太宰だざいつて、そんな変ったやつでも無いじゃないか。」と大声で言うのが、私の耳にも、ちらとはいることがあった。私は、そのたびごとに、へんな気がする。私は、もう、とうから死んでいるのに、おまえたちは、気がつかないのだ。たましいだけが、どうにか生きて。

私は、いま人では無い。芸術家という、一種奇妙な動物である。この死んだ屍むくろを、六十歳まで支え持つてやって、大作家というものをお目にかけて上げようと思っている。その死骸が書いた文章の、秘密を究明しようたつて、それは無駄だ。その亡霊が書いた文章の真似をしようたつて、それもかなわぬ。やめたほうがいい。にこにこ笑っている私を、太宰ざいぼけたな、と囁ささやいている友人もあるようだ。それは間違いないのだ、呆ぼけたのだ、けれども、——と言いかけて、あとは言わぬ。ただ、これだけは信じたまえ。「私は君を、裏切ることは無い。」

エゴが喪失してしまっているのだ。それから、——と言いかけて、これも言いたくなし。もう一つ言える。私を信じないやつは、ばかだ。

さて、兵隊さんの原稿の話であるが、私は、てれくさいのを堪えて、編輯者へんしゅうしゃにお願ごらんいする。ときたま、載せてもらえることがある。その雑誌の広告が新聞に出て、その兵隊さんの名前も、立派な小説家の名前とならんでいるのを見たときは、私は、六年まえ、はじめて或る文芸雑誌に私の小品が発表された、そのときの二倍くらい、うれしかった。ありがたいと思つた。早速さつそく、編輯者へ、千万遍のお礼を述べる。新聞の広告を切り抜いて戦線へ送る。お役に立つた。これが私に、できる精一ぱいの奉公だ。戦線からも、ばんざいであります、という無邪気なお手紙が来る。しばらくして、その兵隊さんの留守宅の奥さんからも、もつたいない言葉の手紙が来る。銃後奉公。どうだ。これでも私はデカダンか。これでも私は、悪徳者か。どうだ。

しかし、私はそれを誰にも言えぬ。考えてみると、それは婦女子の為なすべき奉公で、別段誇るべきほどのことでも無かつた。私はやつぱり阿呆あほうみために、時流にうとい様子の、謂いわば「遊戯文学」を書いてゐる。私は、「ぶん」を知つてゐる。私は、矮小の市民である。時流に対して、なんの号令も、できないのである。さすがにそれが、ときどき侘わびし

くふらと家を出て、石を蹴り蹴り路を歩いて、私は、やはり病気なのであろうか。私は小説というものを間違つて考えているのであろうか、と思案にくれて、いや、そうで無いと打ち消してみても、さて、自分に自信をつける特筆大書の想念が浮ばぬ。確乎かつこたる言葉が無いのだ。のどまで出かかっているような気がしながら、なんだか、わからぬ。私は漂泊の民である。波のまにまに流れ動いて、そうしていつも孤独である。よいしよと、水たまりを飛び越して、ほつとする。水たまりには秋の空が写つて、雲が流れる。なんだか、悲しく、ほつとする。私は、家に引き返す。

家へ帰ると、雑誌社の人に来て待つていた。このごろ、ときどき雑誌社の人や、新聞社の人々が、私の様子を見舞いに来る。私の家は三鷹みたかの奥の、ずっと奥の、畑の中に在るのであるが、ほとんど一日がかりで私の陋屋ろうおくを捜しまわり、やあ、ずいぶん遠いのですね、と汗を拭きながら訪ねて来る。私は不流行の、無名作家なのだから、その都度たいへん恐縮する。

「病気は、もう、いいのですか？」必ず、まず、そうきかれる。私は馴れているので、

「ええ、ふつうの人より丈夫です。」

「どんな工合だったんですか？」

「五年まえのことです。」と答えて、すましている。きちがいでした、などとは答えたくない。

「樽では、」と向うのほうから、白状する。「ずいぶん、ひどかったように聞いています
が。」

「酒を呑んでいるうちに、なおりました。」

「それは、へんですね。」

「どうしたのでしょうかね。」主人も、客と一緒に不思議がっている。「なおっていないの
かも知れませんが、まあ、なおったことにしているのです。際限がないですものね。」

「酒は、たくさん呑みますか？」

「ふつうの人くらいは呑みます。」

その辺の応答までは、まず上出来の部類なのであるが、あと、だんだんいけなくなる。
しどろもどろになるのである。

「どう思います、このごろの他の人の小説を、どう思います。」と問われて、私は、ひど
くまごつく。敢然^{かんぜん}たる言葉を私は、何も持っていないのだ。

「そうですねえ。あんまり読んでいないのですが、何か、いいのがありますか？ 読めば、

たいてい感心するのですが、とにかく、皆よく、さっさと書けるものだど、不思議な気さ
えするのです。皮肉じゃ無いんです。からだが丈夫なんでしょうかね。実に、皆、すらす
ら書いています。」

「Aさんの、あれ読みましたか。」

「ええ、雑誌をいただいたので読みました。」

「あれは、ひどいじゃないか。」

「そうかなあ。僕には面白かったんですが。もっと、ひどい作品だって、たくさんあるん
じゃ無いですか？ 何も、あれを殊ことさら更に非難するては無いと思うんですが。どんな、も
のでしょう。何せ、僕は、よく知らんです。」私の答弁は、狡こうかつ猾の心から、こんなに煮
え切らないのでは無くて、むしろ、卑屈の心から、こんなに、不明瞭になってしまふので
ある。皆、私より偉いような気がしているし、とにかく誰でも一生懸命、精一ぱいで生き
ているのが判っているし、私は何も言えなくなるのだ。

「Bさんを知っていますか？」

「ええ、知っています。」

「こんど、あのひとに小説を書いていただくことになっていますが。」

「ああ、それは、いいですね。Bさんは、とてもいい人です。ぜひ書いてもらいなさい。きつと、いま素晴らしいのが書けると思っています。Bさんには、以前、僕もお世話になったことがあります。」お金を借りているのだ。

「あなたは、どうです。書けますか？」

「僕は、だめです。まるつきり、だめです。下手くそなんですね。恋愛を物語りながら、つい演説口調になったりなんかして、ひとりで呆れて笑ってしまうことがあります。」

「そんなことは無いだろう。あなたは、これまで、若いジエネレーションのトップを切っていたのでしょうか？」

「冗談じゃない。このごろは、まるで、ファウストですよ。あの老博士の書齋での**つぶや**の**びんぎ**がよくわかるようになりました。ひどく、ふけちやつたんですね。ナポレオンが三十すぎたらもう、わが余生は、などと言っていたようですが、あれが判って、可笑しくて仕様が無い。」

「余生ということ、あなた自身に感じるのでですか？」

「僕は、ナポレオンじゃ無いし、そんな、まさか、そんな、まるで違うのですが、でも、ふつと余生を感じることがありますね。僕は、まさか、ファウスト博士みたいに、まさか、

万巻の書を読んだわけでは無いんですが、でも、あれに似た虚無を、ふっと感じることもあるんですね。「ひどくしどろもどろになって来た。

「そんなことじゃ、仕様が無いじゃないですか。あなたは、失礼ですけど、おいくつですか。」

「僕は、三十一です。」

「それじゃ、Cさんより一つ若い。Cさんは、いつ逢つても元気ですよ。文学論でもなんでも、実に、てきぱき言います。あの人の眼は、実にいい。」

「そうですね。Cさんは、僕の高等学校の先輩ですが、いつも、うるんだ情熱的な眼をしていますね。あの人も、これからどんどん書きまくるでしょう。僕は、あの人を好きですよ。」そのCさんにも、私は五年前、たいへんな迷惑をかけている。

「あなたは一体、」と客も私の煮え切らなさに腹が立って来た様子で語調を改め、「小説を書くに当ってどんな信条を持っているのですか。たとえば、ヒュウマニテイとか、愛だとか、社会正義だとか、美だとか、そんなもの、文壇に出てから、現在まで、またこれからも持ちつづけて行くだろうと思われるもの、何か一つでもありますか。」

「あります。悔恨かいこんです。」こんどは、打てば響くの快調を以て、即座に応答することが

できた。「悔恨の無い文学は、屁のかっぱです。悔恨、告白、反省、そんなものから、近代文学が、いや、近代精神が生れた筈なんです。だから、——」また、どもってしまつた。

「なるほど、」と相手も乗り出し来て、「そんな潮流が、いま文壇に無くなつてしまつたのです。それじゃ、あなたは梶井基次郎などを好きでしょうね。」

「このごろ、どうしてだか、いよいよ懐かしくなつて来ました。僕は、古いのかも知れませんが、僕は、ちつとも自分の心を誇つていません。誇るどころか、実に、いやらしいものだと恥じています。宿業しゅくごうという言葉は、どういう意味だか、よく知りませんが、でもそれに近いものを自身に感じています。罪の子、というと、へんに牧師さんくさくさつて、いけません、なんといいつたらいいのかなあ、おれは悪い事を、いつかやらかしたおれは、汚ねえ奴やつだという意識です。その意識を、どうしても消すことができないので、僕は、いつでも卑屈なんです。どうも、自分でも、閉口なのですが、——でも、「言いかけて、またもや、つまずいてしまつた。聖書のことを言おうと思つたのだ。私は、あれで救われたことがある、と言おうと思つたのだが、どうもてれくさくて、言えない。いのちは糧かてにまさり、からだは衣ころもに勝るならずや。空飛ぶ鳥を見よ、播まかず、刈らず、倉に収め

ず。野の百合は如何にして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり、されど榮華を極めし口モンだに、その服装この花の一つにも如かざりき。きようありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや。汝ら、之よりも遙かに優る者ならずや。というキリストの慰めが、私に、「ポオズでなく」生きる力を与えてくれたことが、あつたのだ。けれども、いまは、どうにも、てれくさくて言えない。信仰というものは、黙つてこつそり持つているのが、ほんとうで無いのか。どうも、私は、「信仰」という言葉さえ言い出しにくい。

それから、いろいろとまた、別の話もしたが、来客は、私の思想の齒切れの悪さに、たいへん失望した様子でそろそろ帰り仕度をはじめた。私は、心からお気の毒に感じた。何か、すつきりしたい言葉が無いものかなあ、と思案に暮れるのだが、何も無い。私は、やはり、ぼんやり間拔顔である。きつと私を、いま少し出世させてやろうと思つて、私の様子を見に来てくれたのにちがいないと、その来客の厚志が、よくわかつていただけに、なおさら、自身のぶざまが、やり切れない。お客が帰つて、私は机の前に呆然と坐つて、暮れかけている武蔵野の畑を眺めた。別段、あらたまつた感慨もない。ただ、やり切れない侘びしい。

なんじを訴うる者と共に途みちに在るうちに、早く和解せよ。恐らくは、訴うる者なんじを審判人さばさびとにわたし、審判人は下役したやくにわたし、遂になんじは獄ひとやに入れられん。誠に、なんじに告ぐ、一厘いちりんも残りなく償わずば、其処そこを出づること能あたわじ。(マタイ五の二十五、六。)これあ、おれにも、もういちど地獄じなりが来るのかな? と、ふと思う。おそろしく底から、ごうと地鳴じなりが聞えるような不安である。私だけであろうか。

「おい、お金をくれ。いくらある?」

「さあ、四、五円はございましょう。」

「使つてもいいか。」

「ええ、少しは残して下さいね。」

「わかつてる。九時ごろ迄には帰る。」

私は妻から財布を受け取つて、外へ出る。もう暮れている。霧きりが薄くかかっている。

三鷹三鷹駅ちかくの、すし屋にはいった。酒をくれ。なんという、陳腐ちんぷな、マンネリズムだ。私は、これまで、この言葉を、いったい何百回、何千回、繰りかえしたことであろう。無智な不潔な言葉である。いまの時勢に、くるしいなんて言つて、酒をくらつて、あつぱれ深刻ぶつて、いい気になっている青年が、

もし在ったとしたなら、私は、そいつを、ぶん殴る。躡ちゆうちよ躡ちよせず、ぶん殴る。けれども、いまの私は、その青年と、どこが違うか。同じじゃないか。としをとっているだけに、尚なおさら不潔だ。いい気なもんだ。

私は、まじめな顔をして酒を呑む。私はこれまで、何千升、何万升、の酒を呑んだことか。いやだ、いやだ、と思いつつ呑んでいる。私は酒がきらいなのだ。いちどだって、うまい、と思つて呑んだことが無い。にがいものだ。呑みたくないのだ。よしたいのだ。私は飲酒というものを、罪悪であると思つている。悪徳にきまつている。けれども、酒は私を助けた。私は、それを忘れていない。私は悪徳のかたまりであるから、つまり、毒を以もつて毒を制するというかたちになるのかも知れない。酒は、私の癡狂を制止してくれた。私の自殺を回避させてくれた。私は酒を呑んで、少し自分の思いを、ごまかしてからでなければ、友人とでも、ろくに話のできないほど、それほど卑屈な、弱者なのだ。

少し酔つて来た。すし屋の女中さんは、ことし二十七歳である。いちど結婚して破れて、ここで働いているという。

「だんな、」と私を呼んで、テエブルに近寄つて来た。まじめな顔をしている。「へんな事を言うようですけれど、」と言いかけて帳場のほうを、ひよいと振りむいて覗のぞき、それ

から声を低めて、「あおう、だんなのお知合いの人で、私みたいのを、もらって下さるよ
うなかた無いでしょうか。」

私は女中さんの顔を見直した。女中さんは、にこりともせず、やはり、まじめな顔をして
いる。もとからちゃんとしたまじめな女中さんだったし、まさか、私をからかっている
のでもなからう。

「さあ、」私も、まじめに考えないわけにいかなくなつた。「無いこともないだろうけど、
僕なんかそんなことたのんだつて、仕様がなですよ。」

「ええ、でも、心易いお客さん皆に、たのんで置こうと思つて。」

「へんだね。」私は少し笑つてしまった。

女中さんも、片頬を微笑でゆがめて、

「だんだん、としとるばかりですし、ね。私は初めてじゃないのですから、少しおじいさ
んでも、かまわないのです。そんないいところなぞ望んでいませんから。」

「でも、僕は心当たりですよ。」

「ええ、そんなに急ぐのでないから、心掛けて置いて下さいまし。あおう、私、名刺があ
るんですけれど、」たもと「袂から、そそくさと小さい名刺を出した。「裏に、ここの住所も書い

て置きましたから、もし、適當のかたが見つかったら、ごめんでも、ハガキか何かで、ちよつと教えて下さいまし。ほんとうに、ごめいわくさまです。子供が幾人あつても、私のほうは、かまいませんから。ほんとうに。」

私は黙つて名刺を受け取り、袂にいれた。

「探してみますけれど、約束はできませんよ。お勘定をねがいます。」

そのすし屋を出て、家へ帰る途々、頗る^{すこぶ}へんな気持ちであつた。現代の風潮の一端を見た、と思つた。しらじらしいほど、まじめな世紀である。押すことも引くこともできない。家へ帰り、私は再び唾である。黙つて妻に、いくぶん軽くなつた財布を手渡し、何か言おうとしても、言葉が出ない。お茶漬をたべて、夕刊を読んだ。汽車が走る。イマハ山中^{ヤマナカ}、イマハ浜^{ハマ}、イマハ鉄橋ワタルゾト思ウマモナク、——その童女の歌が、あわれに聞える。

「おい、炭は大丈夫かね。無くなるという話だが。」

「大丈夫でしょう。新聞が騒ぐだけです。そのときは、そのときで、どうにかかりますよ。」

「そうかね。ふとんをしいてくれ。今晚は、仕事は休みだ。」

もう酔いがさめている。酔いがさめると、私は、いつも、なかなか寝つかれない性分な

のだ。どさんと大袈裟おおげさに音たてて寝て、また夕刊を読む。ふつと夕刊一ぱいに無数の卑屈な笑顔があらわれ、はつと思う間に消え失せた。みんな、卑屈なかなあ、と思う。誰も自信が無いのかなあ、と思う。夕刊を投げ出して、両方の手で眼玉を押しつぶすほどに強くぎゅつとおさえる。しばらく、こうしているうちに、眠たくなって来るような迷信が私にあるのだ。けさの水たまりを思い出す。あの水たまりの在るうちは、——と思う。むりにも自分にそう思い込ませる。やはり私は辻音楽師つぎまだ。ぶざまでも、私は私のヴァイオリンを続けて奏するより他はないのかも知れぬ。汽車の行方ゆくえは、志士にまかせよ。「待つ」という言葉が、いきなり特筆大書で、額ひたいに光った。何を待つやら。私は知らぬ。けれども、これは尊い言葉だ。唾の鷗は、沖をさまよい、そう思いつつ、けれども無言で、さまよいつづける。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

初出：「知性」

1940（昭和15）年1月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年11月22日公開

2012年8月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴

——ひそひそ聞える。なんだか聞える。

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>